

石岡市立ふるさと歴史館 第二十五回企画展

村田宗右衛門の本棚

國文自在

石岡地位等級

村田宗右衛門



鐵道

旅行案内

大日本史

初學經濟論

六月興行大歌舞伎

令和3年4月28日（水）～8月1日（日）

開館時間 午前10時～午後4時30分

月曜休館（祝日の場合は翌日） 入館無料

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校地内 Tel:0299-23-2398

石岡市立ふるさと歴史館 第25回企画展

村田宗右衛門の本棚

◆目次

はじめに	1
村田宗右衛門の紹介	2
仕事関係資料	7
教育関係資料	11
趣味関係資料	15
おわりに	18

◆例言

本冊子は、令和3年(2021)4月28日～8月1日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第25回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課(竹内智晴)が行いました。

展示にあたっては以下の文献をはじめ、多くの文献を参考といたしました。

茨城県『茨城県史 近現代編』1984年

清凉寺『興国山清凉寺史』2001年

常陸郷土資料館『故山口誠太郎博士遺稿 元治甲子府中杉並戦争物語 筑波義軍旗挙の前後』1981年

◆謝辞

本展示は以下の方々からのご協力によって開催することができました。心より感謝申し上げます。

皆藤行子，桜田宏子，吉久保悟 (五十音順，敬称略)

はじめに



これまでに石岡市には 5000 点を超える書籍・文書資料が寄贈されています。これらの多くは布や紙，木材でできており，簡単に虫やカビなどの菌によって傷んでしまいます。また，寄贈された状態のまま展示すると他の資料に虫や菌を広げてしまうので，せっかくの資料を活用できません。そのため石岡市では近年，皆様から寄贈された書籍・文書資料に対して特殊な薬品で殺虫殺菌を行う^{くんじょう}燻蒸処理を進めています。

今回の展示では，令和 2 年度に燻蒸処理を実施した「^{むらたそう}村田宗右衛門^{えもん}文書」を中心に皆さんに紹介します。村田宗右衛門は近世から近代にかけて醸造業で成功した豪商であり，郵便局の開設などを行った事業家としても石岡市史などで紹介されていますが，燻蒸された資料を紐解くと，石岡市史には載っていない豪商の姿が見えてきます。展示を通して，近世から近代にかけての石岡を支えた人物を知るきっかけとなれば幸いです。



虫害を受けている資料

寄贈された資料は，多くの場合虫や菌による影響を受けています。このままではせっかくいただいた寄贈資料が壊れてしまうので，燻蒸処理によって虫や菌の活動を抑制します。

豪商・村田宗右衛門



村田宗右衛門家は近世から近代にかけて醤油・酒などの醸造業で財を成し、「江戸から仙台までの街道中最大の豪商」とまで言われた商家です。石岡市史には初代・二代・三代の村田宗右衛門が紹介されています。

初代村田宗右衛門は明和 7 年（1770）、近江国^{ひのちよう}日野町（現滋賀県日野町）に生まれました。近江国といえば日本三大商人の一つ、近江商人が有名であり、日野町も中世以来商工業が盛んな地域です。日野町出身の商人は漆器・医薬品・醸造業などを主に扱い、北関東に進出するものが多いという特徴があります。初代村田宗右衛門もこの流れを汲み、文政 12 年（1829）に石岡へ移り住みました。近江出身の宗右衛門ということで「近江屋」や「近宗」と名乗りました。当初は大徳などの銘柄で知られる大和田家の倉庫を借り酒造を始め、後に守木町に土地を得て広大な酒蔵を構えました。また石岡以外にも水戸や下館など各地に酒蔵を建て、さらに醤油の醸造を始めるなど経営を拡大しました。

二代目村田宗右衛門は文化 4 年（1807）の生まれです。豪快な勤勉家であり、家業をよく守り経営の地盤固めに努めました。文久元年（1861）刊行の江戸で人気の酒を集めすごろく形式にした「新撰銘酒寿語禄」に村田宗右衛門家の商品「富士一山」が載っています（第 10 回企画展参照）。このことから近世末期までには江戸方面へ販路を拡大し商売を確立していたことがわかります。

三代目村田宗右衛門は天保 14 年（1843）に二代目の次男として誕生しました。派手で社交的な性格であり、東京からの来客が多く家族はその対応に大忙しであったというエピソードが残っています。書画を趣味とし、明治の三筆の一人に数えられる

いわやいちろく 巖谷一六に書道を師事し、ありすがわのみや 有栖川宮家に出入りするなど、有名人と交流を持ちました。また、娘が「キッコーマン」で有名な野田の醤油醸造家・もぎけいざぶろう 茂木啓三郎や野田商誘銀行支配人を務めた茂木

しちろうじ 七郎治といった茂木一族へ嫁いでいます。茂木一族は文政年間には醤油の江戸幕府御用醸造に任命されるなど醤油醸造業を軸に確固たる地位を築いた「紫大尽」であり、この婚姻関係は村田宗右衛門家の隆盛を示しています。

三代目は醸造業以外にも石岡の近代化に貢献した人物として知られています。明治 5 年（1872）に戸長を務め、明治 6 年には郵便局を開局するなど積極的に近代制度を取り入れました。その他、愛宕山や山崎の山林を開墾し公園や耕作地を拡大したこと、清涼寺の火災からの復興支援などが知られ、人のためによく行動することから人々に「なさけの近宗」と呼ばれました。



守木町郵便局

明治 6 年に三代目村田宗右衛門によって設置されました。



清涼寺

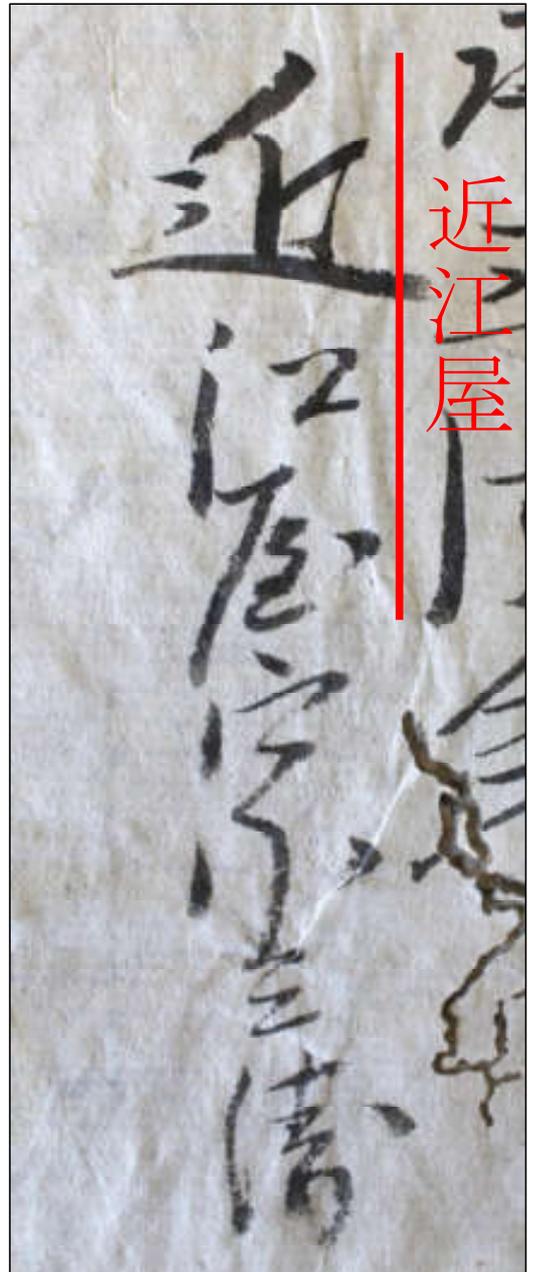
境内に村田宗右衛門家の石碑が建つなど関係が深い寺院です。



二代目村田宗右衛門 吉久保家文書



三代目村田宗右衛門 吉久保家文書



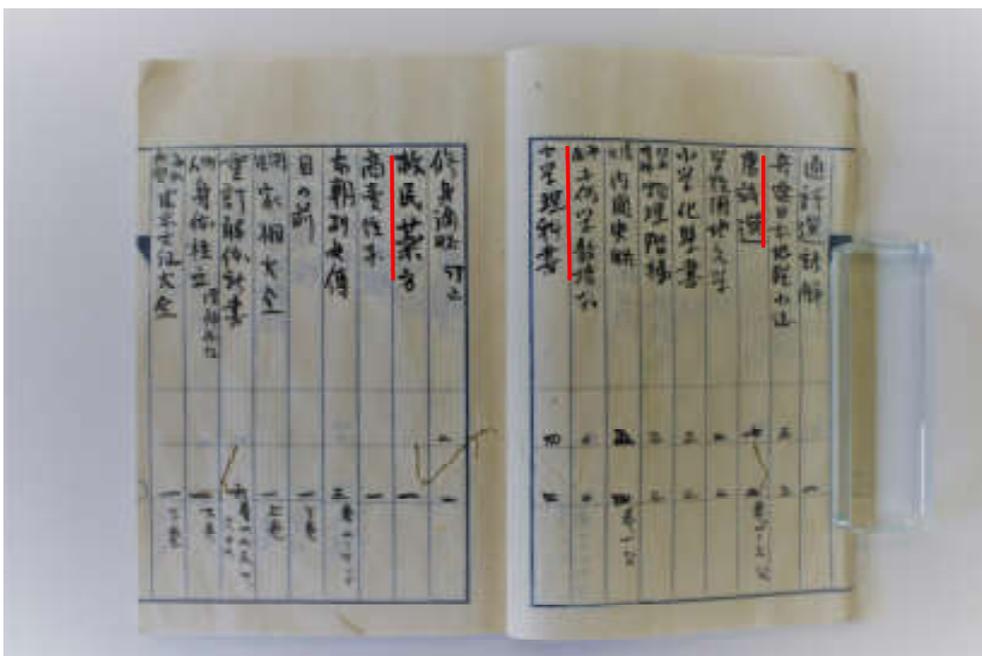
「近江屋」や「近宗」の記名・印が残ります。

村田宗右衛門家の図書目録



石岡市には村田宗右衛門家に残された多数の書籍・文書が寄贈されています。その中に村田宗右衛門家の「図書目録」がありました。この図書目録には171種767冊の書籍が記録されており、現存しない書籍もあります。刊行年が明確なものの中で最も新しい書籍は明治20年刊行の「小学理科書」であり、寄贈資料にある明治23年刊行の「^{こくぶんぜんしよ}國文全書」は載っていません。このことから、図書目録は明治20年ごろに作成されたものと推測できます。

図書目録を開いてみると、実に多様な書籍が記録されていますが、大きくは仕事に関して収集・作成されたもの、教育に使用されたもの、趣味・娯楽に関するものなどに分けられます。これらを解体してみると、石岡市史には書かれていない豪商の姿が見えてきます。



図書目録

仕事関連の手紙の文例集「商売往来」、明治期の教科書「小学理科書」、近世に広く用いられた漢詩選書「唐詩選」など、多様な書籍が確認できる

近代化の波と商人

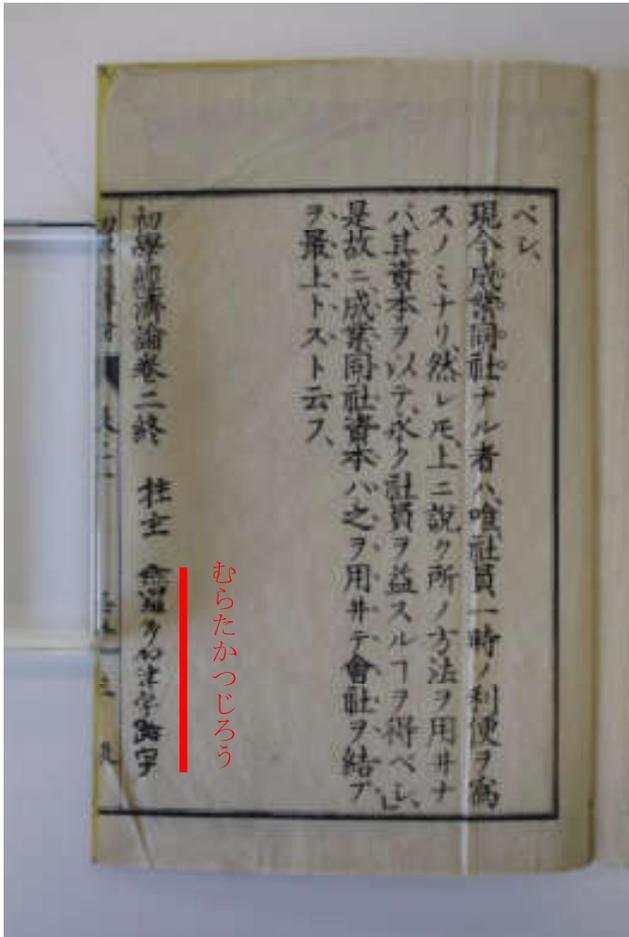


村田宗右衛門家には明治 4 年刊行の明治維新解説書「東京^{とうきょう}土産^{みやげ}」や明治 12 年刊行の「民間経済録^{みんかんけいざいろく}」, 明治 15 年刊行の「初学^{しょがく}経済論^{けいざいろん}」といった経済学書など, 明治維新によって大きく変化した制度を解説する書籍が残り, そこから近代化の波に巻き込まれた商人の様子がうかがえます。

明治維新を迎えて大きく変わった制度の一つに貨幣制度があります。江戸時代の日本には金・銀・銭・藩札などが流通し, 両替レートも金 1 両＝銀 60 匁＝銭 6500 文など複雑でした。また明治維新直後にはそれらに加えて太政官札などが発行されたことで一層複雑になり, 日本の貨幣制度は混乱してしまいました。そこで新政府は明治 4 年に新貨条例を發布します。この条例により複雑だった貨幣制度が大きく整理されました。

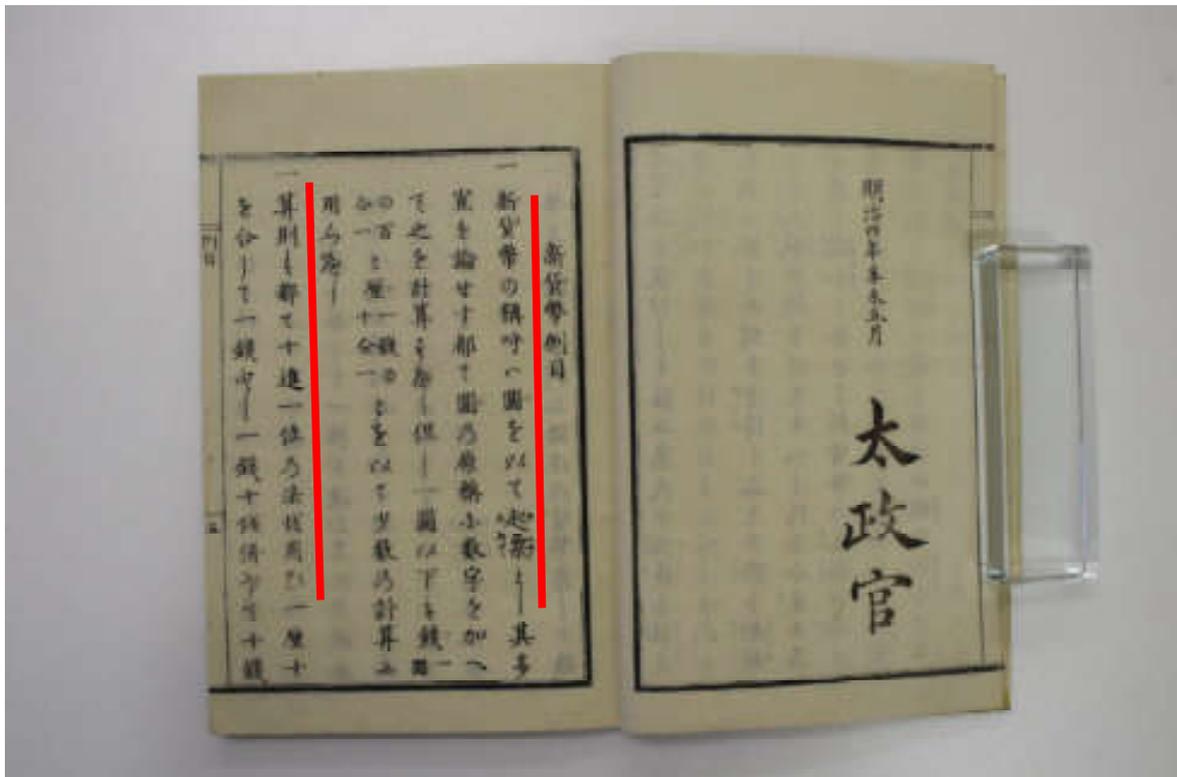
貨幣制度が大きく転換したことで, 日常的に貨幣を用いた取引を行う商人も新制度への対応を余儀なくされます。その様子が分かる資料が明治 4 年刊行の「新貨条例^{しんかじょうれい}」であり, 三代目の時期に利用された書籍です。旧貨幣と新貨幣の両替レートなどが書かれており, 新しい貨幣制度へどのように切り替えていったのかがわかります。急激に変わった貨幣制度に対して, 商人・村田宗右衛門はこの本を片手に混乱期を乗り切ったのでしょう。近代化の波に巻き込まれた商人の苦労がうかがえる貴重な資料です。

初学経済論 明治 15 年



三代目の次男である村田^{かつじろう}勝次郎が使用したものです。海外から流入した経済学理論によって商人を取り巻く環境も変わりました。その変化に適応するために、明治期の人々は若年期から経済学を学び近代化の波を乗り越えました。

村田勝次郎は後に三代目から郵便局長を継ぎ、明治 44 年に設立された石岡電気株式会社の発起人 10 名に加わるなど近代石岡を支えました。



新貨條例 明治 4 年

両から円への切り替え、十進法の導入などがらりと制度が変化しました。なじみのない制度に商人たちは大いに戸惑ったのではないのでしょうか。

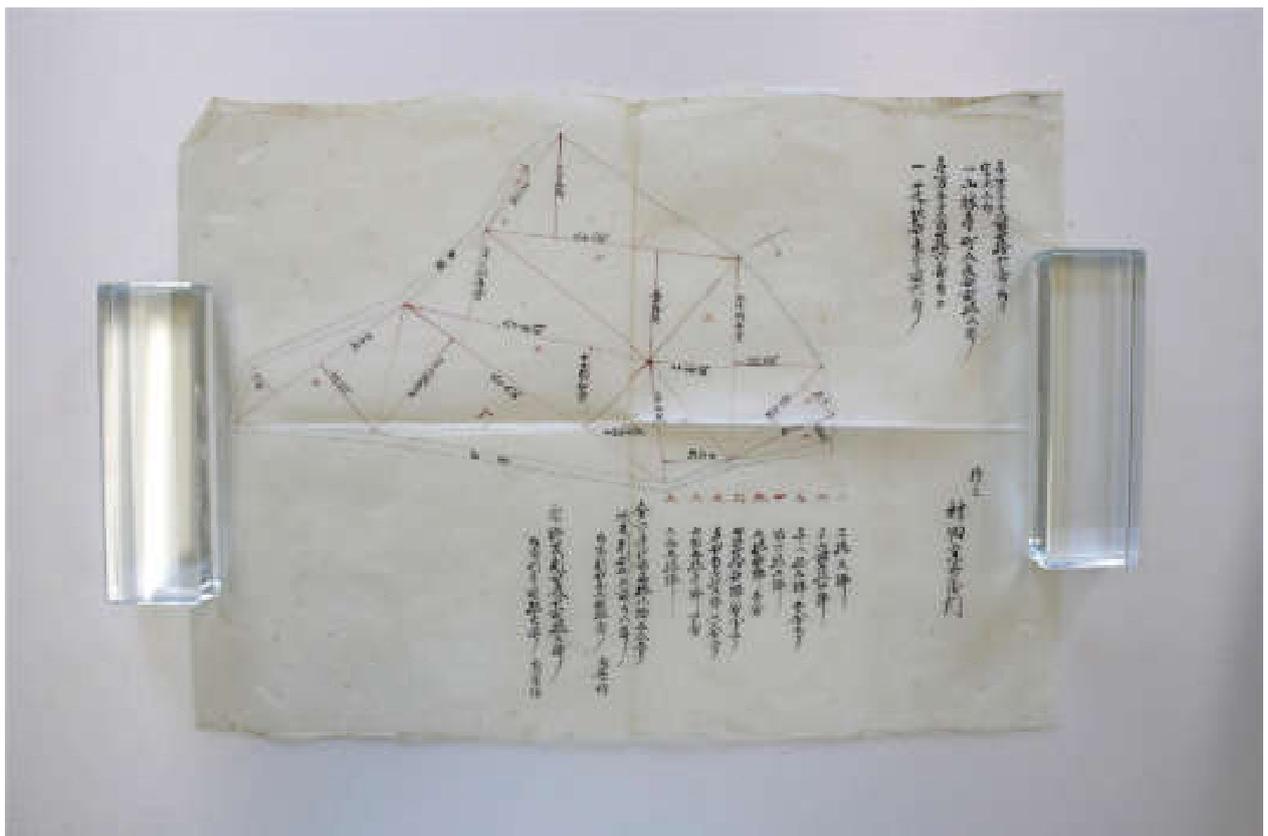
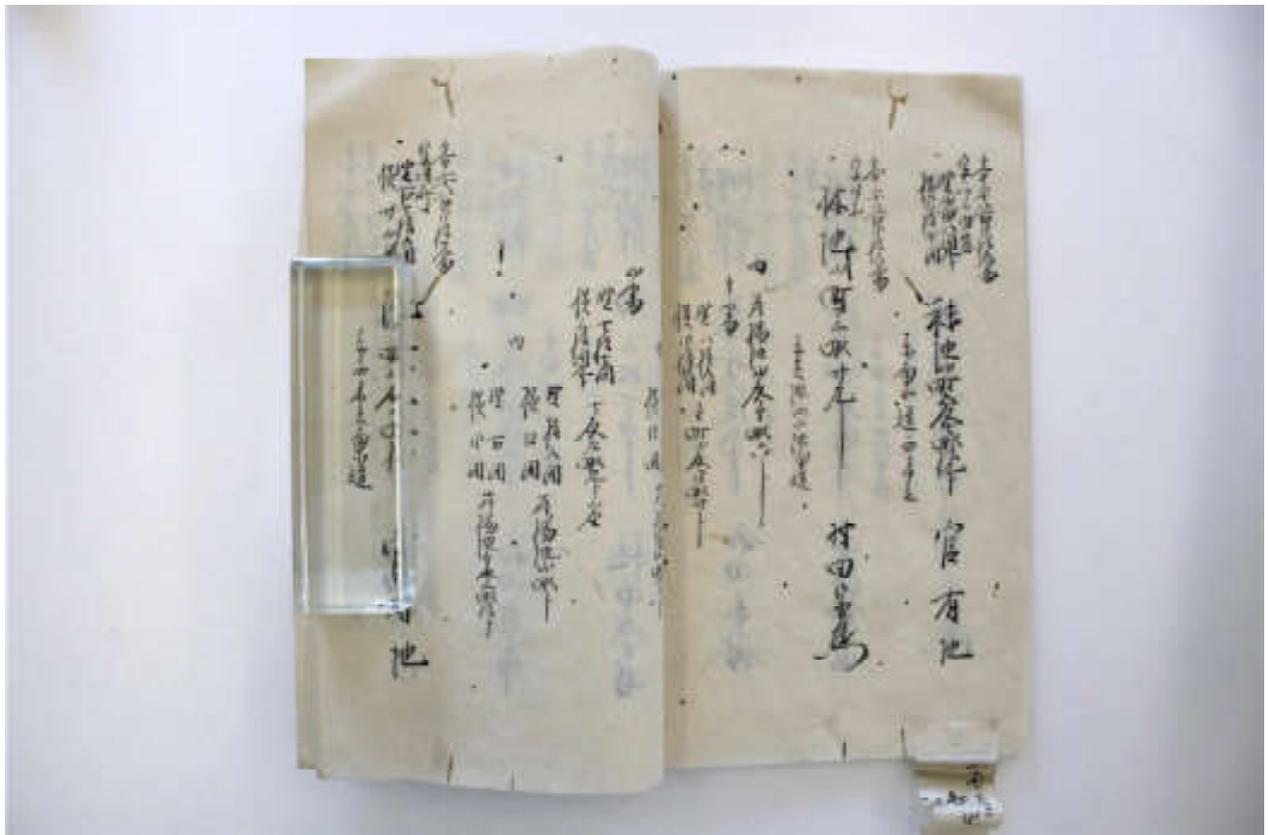
商家に残った地租改正資料



仕事に関する資料は、醸造業などの商業活動に関するものと、郵便局・戸長など行政活動に関するものに細分することができます。行政活動については、郵便局長としての村田宗右衛門は石岡市史などにも掲載があり比較的知られていますが、戸長の仕事についてはあまり知られていません。そこで今回は戸長としての村田宗右衛門に関する資料をご紹介します。

村田宗右衛門が戸長に任命されたのは明治5年であり、その翌年に始まったのが「地租改正」です。地租改正事業を末端で担ったのは各地の戸長・副戸長でした。地租改正関連で村田宗右衛門家に残る資料に「じびきちょう地引帳」と「いしおかち いとうきゅうちょう石岡地位等級帳」があります。地租改正事業では各土地の地種地目や面積、持主などが調査され、その過程で土地の一覧である地引帳や収穫高などから土地を等級分けした地位等級帳などが作成されました。地引帳には官有地・民有地の区分が記入されていることから明治8～9年頃、地位等級帳は明治9～11年頃の作成とと思われます。

地租改正は茨城県内でも真壁郡や那珂郡で反対一揆が発生するなど、反対も多い難事業でした。また、膨大な量の土地を数年という短期間で調査し取りまとめなければならないことからもたいへんな作業であったことが想像できます。本資料は石岡に近代制度を導入するために難事業に挑んだ戸長・村田宗右衛門の働きを教えてくれる貴重な資料です。



地引帳 第47号

上のように土地の地目や持主，面積等を調べ一覧にしました。
 また，本資料には村田宗右衛門の土地を調べた際のメモが挟まれており，
 土地を三角形で分割していき面積を出す三斜法で調べたことがわかります。

村田宗右衛門と水戸学



村田宗右衛門家から市には書籍・文書資料が 300 点以上寄贈されています。その中で特に多いのが教育に関連する資料です。

教育関連資料を見ると、「大日本史」^{だいにほんし}「皇朝史略」^{こうちょうしりやく}「東湖詩鈔」^{とうこししやう}といった水戸学関連の書籍が多いことに気づきます。石岡は元治元年（1864）の天狗党の乱時に天狗党の拠点の一つになり、薄井龍之などの参加者が一時期私塾を開いています。人々が水戸学に触れる機会は身近に存在しました。また、天狗党の乱に先行する時期の資料として嘉永 5 年（1852）、二代目村田宗右衛門のところに写された「東照宮御遺訓」^{とうしょうぐうごいくん}があります。東照宮御遺訓は東照宮＝徳川家康の教えが書かれたものであり、政道書として武士層に広く読まれました。この資料からは村田宗右衛門が為政者側に進出し、政治学などを学び始めたことが読み取れます。元治元年の時点で三代目村田宗右衛門は 21 歳の青年です。二代目から東照宮御遺訓などを教科書にして政道を学び、それを足掛かりに府中に集まる天狗黨員との交流によって政治学などを内包する水戸学へ踏み込んだ可能性は十分考えられます。

村田宗右衛門は天狗党へ参加することなどはなく、直接的な尊王攘夷活動を行ってはいません。しかしながら、天狗党が元治元年 8 月 24 日に起こした染谷焼き討ち事件の際に、染谷村へ大量の見舞い品を贈るという事件のフォローと思える行動をしています。こうした行動の背景には、同じ水戸学を学んだものとして、天狗党の行動に同情する部分があったのかもしれない。



東照宮御遺訓 嘉永5年

「嘉永五壬子立春 村田氏写之」とあります。

御用金の納入などで藩政と近づいたこととの関係が考えられます。



常野紀聞 明治9年

明治期にまとめられた天狗党の乱の記録。

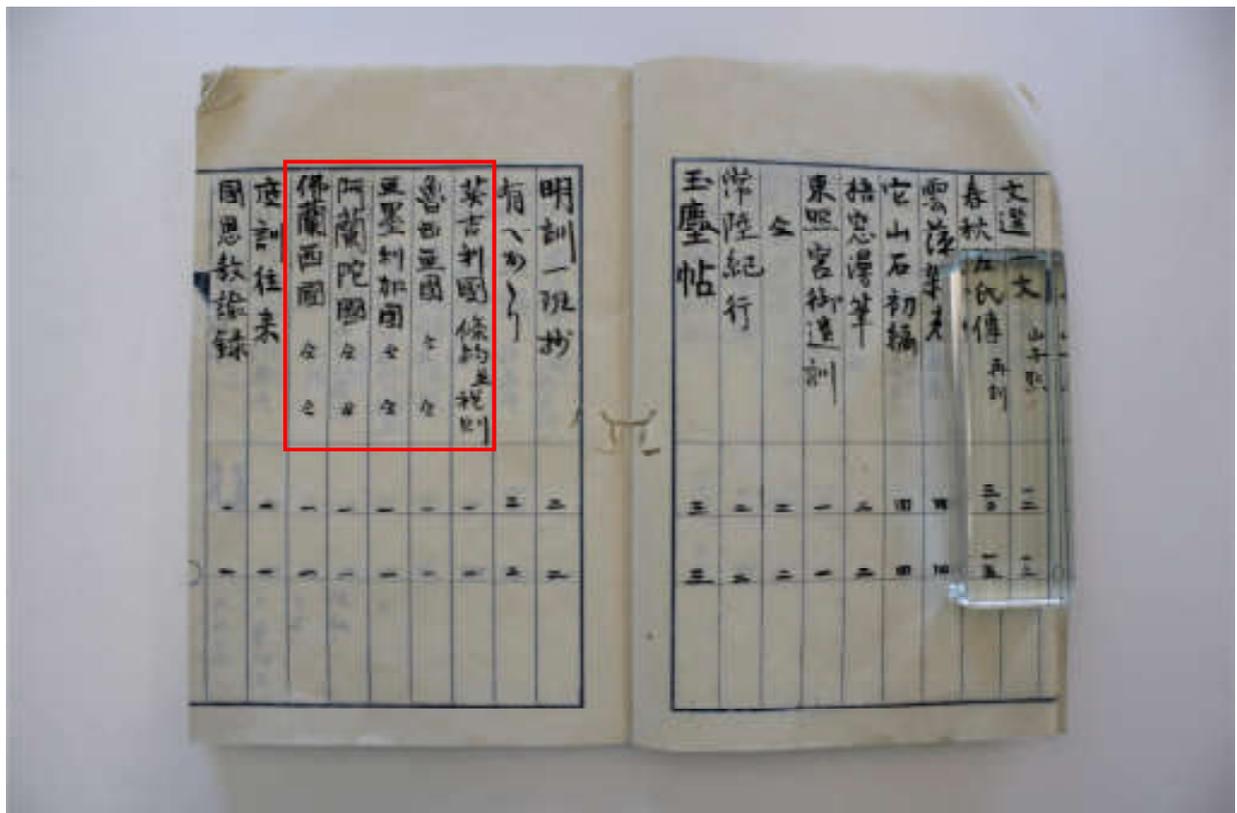
乱の鎮静化後も天狗党を気にかけていたようです。

安政五力国条約



村田宗右衛門家の図書目録には、現存はしないものの水戸学を学んだことと関係がありそうな書籍がいくつか見られます。

図書目録中に^{いぎりす}英吉利國・^{あめりか}亞墨利加國・^{ろしあ}魯西亞國・^{おらんだ}阿蘭陀國・^{ふらんす}佛蘭西國と5力国分の条約・税則に関する書籍が記録されています。これは安政6年（1859）に刊行された日米修好通商条約などのいわゆる安政五力国条約の日本語訳本と思われます。安政五力国条約の締結は、安政の大獄や天狗党の乱の原因となるなど近世日本を大きく揺るがすこととなります。水戸学を学んだ村田宗右衛門は、これらの本を取り寄せ内容を吟味することで、急激に変化していく日本の状況を考察していたのでしょう。



男児も女兒も書が大事



教科書類は「大和俗訓」^{やまとぞっくん}「慎思録」^{しんしろうく}などの道德書，算数の教科書である「筆算題叢」^{ひっさんだいそう}，作文の参考書である「國文自在」^{こくぶんじざい}など時期も種類も多様に残りますが，特に多いのが書道関係資料です。

書道の手本や練習帳は 38 点確認できます。使用者は，ひさ・友之助・せい（静）・文之助の 4 人が確認できます。ひさは二代目村田宗右衛門の三女であり，三代目の妹です。友之助の手本には元治元年，せいの手本には元治 2 年とあることから，近世末に教育を受けた人物です。ひさと同じ三代目の兄弟の可能性がありまます。文之助は三代目の次男である村田勝次郎の長男，つまり三代目の孫にあたります。このことから，近世末から近代にかけての書道手本が代々残されていることがわかります。

三代目村田宗右衛門は巖谷一六に書を師事し，また書道・歌道に通じる有栖川宮家と交流を持ちました。そのような芸術面での交流を持てた背景には，二代目の教育方針が関係していると思われるまます。元治年間の男女両方の手本が残ることから，二代目が男女の隔てなく書を重視し練習させたことがわかります。近世の寺子屋教育においては書道が重要課題であり，二代目も基礎として特に力を入れたようです。そうして身についた技術が後の著名人との交流の支えとなり，芸術家・三代目村田宗右衛門のきっかけとなったのではないのでしょうか。もしかしたら，二代目自身も財力をつけ上流階級の人々と接する機会が増える中で文化力の必要性を感じ，我が子に身につけさせたのかもしれない。

多彩な趣味の理由



三代目村田宗右衛門は東京に居を構え書画を趣味としたことが知られています。寄贈資料を見てみると、漢詩に関連する「唐詩選」、和歌に関連する「短歌集」や「和歌八重垣」、俳句に関する「一茶発句集」など、多様な趣味に関する資料が残ります。

その他、現存はしませんが図書目録中には「囲碁終録」とあり、囲碁を打つ人物がいたようです。また書籍はありませんが、茶釜や菓子椀が残ることから、茶道もたしなまれていたようです。

村田宗右衛門家は前述の通り書道・歌道に通じる有栖川宮家と交流しています。また三代目の妹ひさは野田の茂木一族である茂木林景に嫁いでいますが、この人物も和歌や俳句を好んだことが知られています。そうした人々と交流していくための武器として村田宗右衛門家では多様な趣味の知識を身につけたものと思われる。



図書目録中にある「囲碁終録」は天保 15 年刊行の井上因碩による「囲碁終解録」と思われます。囲碁終録の隣に「真行草千文字 一六先生書」とありますが、こちらは巖谷一六による書道の手本と思われます。

庶民的な趣味



村田宗右衛門家の人々が楽しんだであろう娯楽がわかる資料に、「佐倉惣五郎物語」や「真書太閤記」があります。佐倉惣五郎物語は義民・佐倉惣五郎を主人公にした物語であり、農民のために命を懸ける主人公が人気を呼び歌舞伎や講談でも取り上げられています。嘉永3年の刊行です。真書太閤記は栗原柳庵によって近世後期から近代初期にまとめられた豊臣秀吉の一代記です。農民から関白になる出世話へのあこがれから、近世を通して豊臣秀吉を題材とした作品は人気でした。村田宗右衛門家の人々も余暇にはこれらの作品を読んで楽しんだのでしょう。豪商の庶民的な側面が垣間見えます。

やや時代は変わり昭和期の資料では、昭和18年の「六月興業大歌舞伎」のパンフレットがあります。歌舞伎の演目を見てみると「かなてほんちゅうしんぐら假名手本忠臣蔵」や「いっぽんがたなどひょういり一本刀土俵入」であり義理人情の話は世代が変わっても人気であったことがわかります。



真書太閤記 12篇第26

非常にリラックスした状態で読まれていたのか、落書きが残されています。村田宗右衛門家の誰が描いた絵なのか、とても気になります。

ぜいたくな趣味 旅行関係資料



村田宗右衛門家の寄贈資料には、旅行に関係する資料が年代を超えて存在します。

近世にさかのぼるものでは文政9年刊行の「常陸紀行」や明和年間刊行の「日光名跡誌」があります。常陸紀行は常陸国の名所を案内するものであり、日光名跡誌はその名の通り日光の名所を案内するものです。日光といえば江戸幕府の開祖徳川家康を奉る日光東照宮が有名であり、天狗党も拳兵後に参拝を試みています。水戸学を学んでいた村田宗右衛門も、聖地巡礼として何度か訪れたのかもしれませんが。

近代に入ると鉄道の利用がわかる資料が残ります。最も古いものでは明治44年の「遊覧地案内」があり、その他大正10年の「鉄道旅行案内」や昭和11年の「東京鉄道局旅行カタログ」、昭和17年の「時刻表」が残ります。遊覧地案内には明治44年当時の鉄道運賃表が付属しています。上野—水戸の鉄道運賃は3等客室で1.15円、一等客室では3.03円です。当時の物価は、明治39年に発表された夏目漱石の坊ちゃんを読むと、新卒教員の初任給が月額40円とあります。現代の新卒教員の初任給はおよそ20万円ですので、当時の上野—水戸の鉄道運賃を現代の物価に直すと三等客室でおよそ5,750円、一等客室ではおよそ15,150円となります。令和3年4月時点で上野—水戸の運賃は特急を使用しても3,890円ですので、明治44年の鉄道旅行はぜいたくな趣味だったといえるでしょう。村田宗右衛門家の裕福な生活がうかがえます。

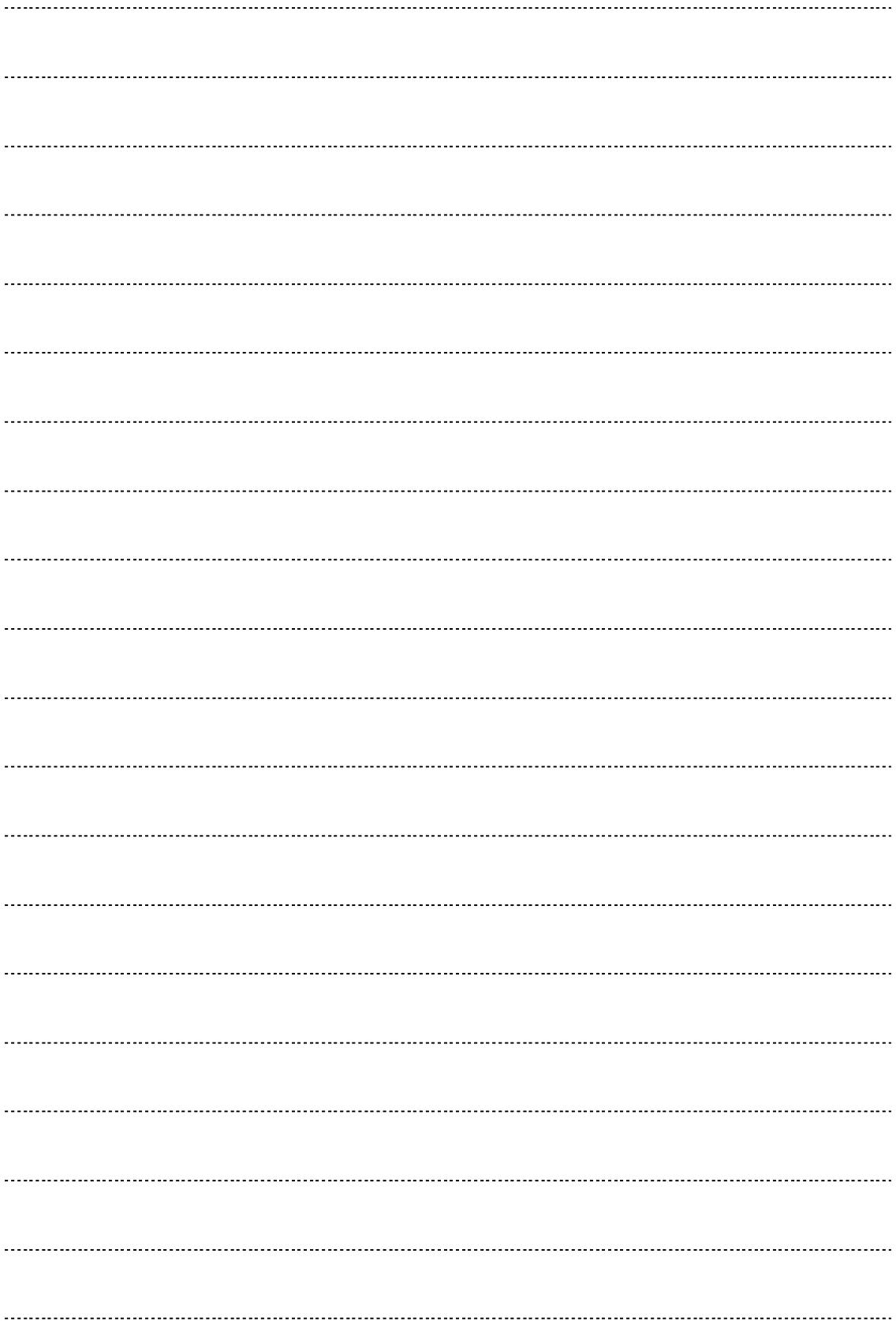
おわりに

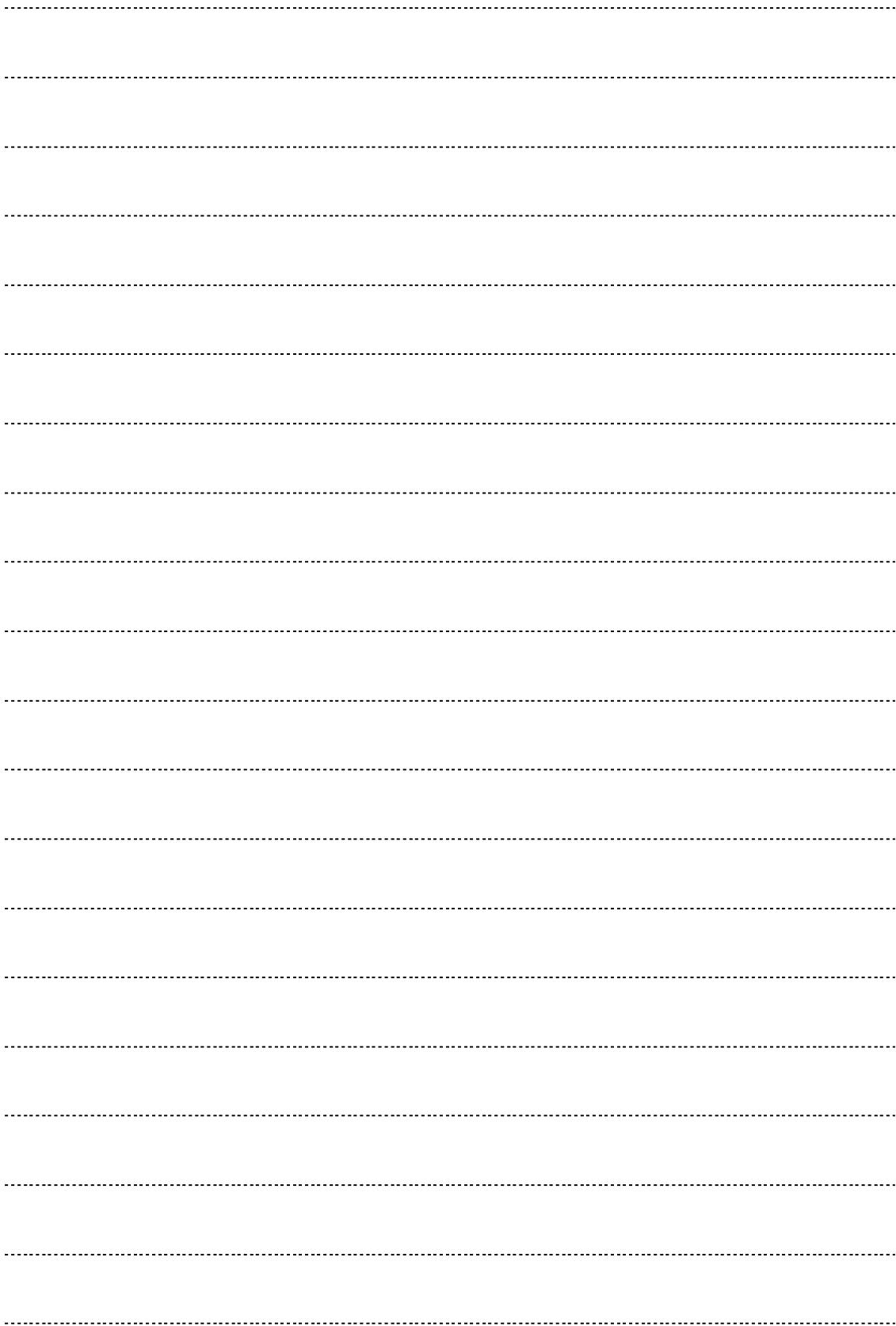


今回の展示では、村田宗右衛門家に残された文書・書籍の一部から、近世から近代への制度変化に対応する様子や、近世の有力商人の教育事情、楽しんでいた趣味など、商家の生活の細部を紹介しました。水戸学関連資料の発見や戸長として地租改正に取り組んでいたことなどは、今回寄贈資料の一部を整理したことで得られた新たな情報です。また、庶民的な側面は当時の生活史を復元するうえで貴重な情報です。石岡を代表する商人であった村田宗右衛門家の資料整理を進めることで、さらに近世・近代の石岡の歴史を掘り下げることが期待できます。

村田宗右衛門文書には文書一括として未だ整理されていない資料群が存在しています。そこからは今後も新しい歴史が確認される可能性があります。引き続き整理を進めていきますので、続報をお待ちください。

石岡市には市民の皆様から様々な文書・書籍資料が寄贈されています。これらは文字によって当時を記録し、また集まったその姿からも積み上げられてきた家や個人の歴史を教えてくれる貴重な資料です。石岡市では将来にわたってそれらの文書・書籍資料を受け継いでいけるように保存処理を進めています。今後も保存処理が終わった資料については、ふるさと歴史館の企画展等で市民の皆様にご報告できればと考えておりますので、今後ともよろしく願いいたします。





石岡市立ふるさと歴史館 第25回企画展

村田宗右衛門の本棚

令和3年4月28日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195

茨城県石岡市柿岡 5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016

茨城県石岡市総社 1-2-10

TEL 0299-23-2398